

## 編集後記

<\*> 巻頭言は「FIAは簡便迅速か」と題して小熊幸一先生に執筆して頂きました。指標は J. Wang 先生 (USA) と藤原照文先生にお願いいたしました。Wang 先生は FIA 検出器としてのバイオセンサーの生体試料、食品分析などにおける発展について述べられています。藤原先生は、化学発光 (CL) 検出では FIA 法を用いると” on site” でのモニタリングに最適であり、新規な CL 反応系の開発により定量できる無機イオン種の拡大を計ることが可能になるであろうと述べておられます。新しい検出法の開拓により、ますます FIA 法が発展することを期待します。現在、FIA 法を用いる分析に携わっている人、新しい FIA 法を開発しようとしている人、FIA 用機器の製造と改良に携わっている人々が多分それぞれの立場で、FIA 法を見直し、一歩進んだ FIA 法を模索しているのではないのでしょうか。この号の、巻頭言、指標から解答が得られるような気がしました。

<\*> 総説は受田先生と石井先生・山田先生にお願いしました。

<\*> 今号では、研究報告として外国からの一編が採用されました。次号には国内からの投稿をお待ちしています。

<\*> Flow Analysis VI の報告記事からは、スペインのにおいとにぎやかな音楽が聞こえます。是非読んでください。

<\*> 総ての欄へ積極的に投稿をお願いいたします。  
特に技術報告、トピクス、海外レポートなど。

編集委員会 和田弘子